



カザフスタンにて 撮影／奥野 達夫

チエーリツプ。
四季だより

2001. 冬号
Vol.17

『四季を楽しむ』

園芸研究家 柳 宗民



▲1月 ロウバイ

わが国ほど四季のはっきりした国も少ない。南北の緯度には大きな差があるが、多くは一年十二ヶ月を三ヶ月づつ四季に分けることができるのがわが国である。雪国以外では、毎月、なにかしら花木が咲く。一月のロウバイに始まり、二月のマンスク、ウメ、ジンチョウゲが香る三月、四月・五月はそれこそよりどりみどり、いろいろな花木が咲いてくれるし、花の少なくなる梅雨時には、それを救うように咲いてくれるアジサイ、クチナシ、ザクロがある。梅雨明けと共にムクゲが咲き出す。八月の猛暑に負けずに咲くサルズベリやノウゼンカズラ、やがて秋風が立ち始める九月はハギの季節、彼岸が終わる

▼4月 八重桜



とモクセイが香り、秋深まるとサザンカがわが世をうたい出し、十二月からは冬の紅一点、カンツバキが咲き出して一年をしめくくる。このようにして、月それぞれに咲く花が移り変わり、咲く花によって四季を感じるのがわが国で、万葉集に百六十六種もの植物が詠みこまれているのも四季の国ならではのことと思う。草木だけではない。私達の食生活も、住居様式も、衣替えの風習も、四季にのっとった習慣であるし、特に食文化は、まさに四季の食文化と云いたい。

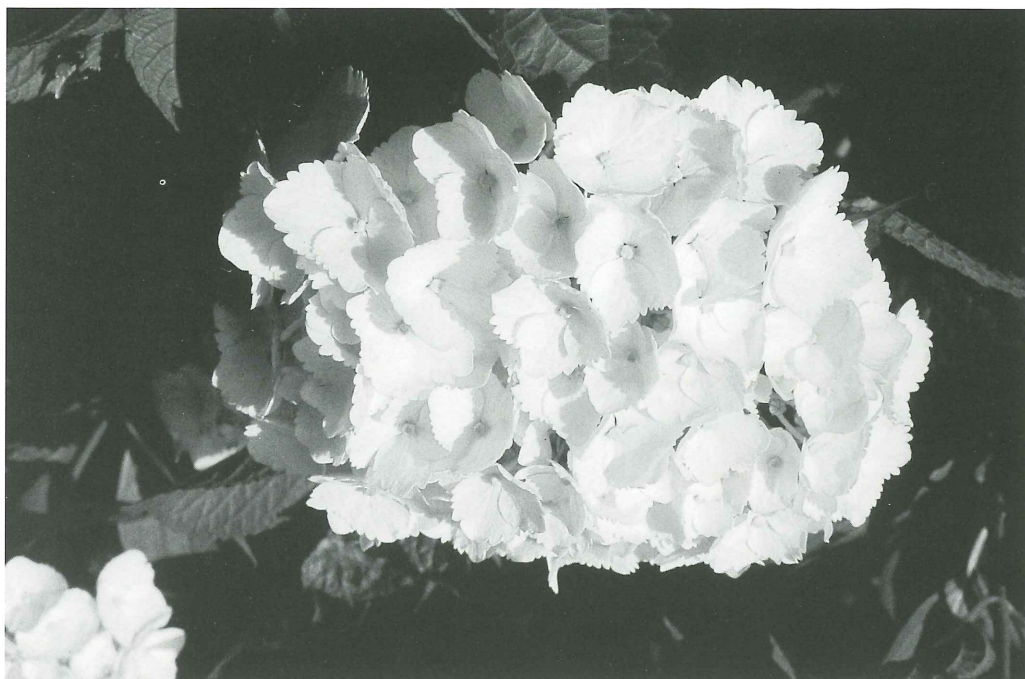
近頃、このわが国の四季感が大いに崩れ始めている。夏野菜のトマト、ナス、キュウリなど周年栽培によっていつでも安価に食べられるし、冷凍技術の発達によって、魚にも四季感がうすれてしまった。秋花壇の草花であったサルビアやマリゴールドが春花壇に植えられ、春花壇のパンジーはすっかり冬花壇の草花になってしまった。花屋、園芸店の店先を見ても、いつ咲く花だか解らなくなるほど季節感がうすれてしまっている。生産者は本来の時期以外に出荷した



▲5月 バラ

方が高値に売れるからと競争で時期外れ生産をする。このように、季節外れのもが容易に食べられる、観られるということは一面ありがたいことであるかもしれないが、わが国独特の旬を楽しむという風習がうすれてしまうのはどんなものであろう

か。四季の国に住む私達にとって、四季感をなくすよりも、この四季を存分に味わい楽しむ方がより幸せであると思うであろう。家庭園芸がブームであるが、せめて家庭園芸だけでも四季にのっとった栽培をして、花の旬を楽しみたいものである。



▲ 6月 アジサイ



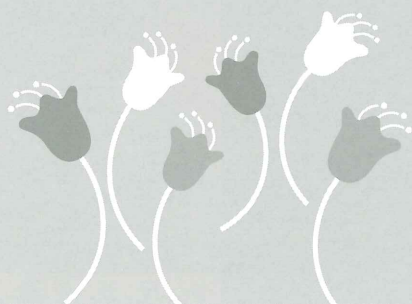
◀ 11月 ムラサキシキブ

略歴

やなぎ おねたみ



一九二七年生まれ。
東京農科大学・恵泉女学園短期大学
各講師を経て、現在、(株)園芸文化協
会評議員、NHKテレビ趣味の園芸、
NHKラジオお楽しみ園芸、NHK
テレビ楽しい園芸各レギュラー講師、
柳育種花園経営。
著書「園芸は楽しい」他、多数。



cnb MARKT Visieより
チューリップの自生地

カザフスタン

「多種多様な植物が自生するカザフスタン」

オランダでは、またそれ以外の国々においてもチューリップの野生種は専門家の関心事である。ウィム・レマーズはそのような専門家の一人である。彼は二〇〇〇年、はるか遠いカザフスタンを何度も訪れた。そして、その地がまさに野生チューリップの宝庫であることがわかった。カザフスタンは、ほぼ西ヨーロッパに匹敵する広さで、約三十種のチューリップが自生する。レマーズは、その内二十種が実際に花が咲いているのを見て写真に収めた。リッセでも、珍しいフリチラリアやアイリス、エラムレスが人目を引く場所に並べられている。

ジールランド、南アフリカほか、アメリカにおいては幾度となく滞在した。ここ数年は定期的に中央アジア（旧ソ連）に滞在し、一九九九年にはイギリス人とスコットランド人のカザフスタンの選抜チームと共に

▼T.kolpakowskiana 'コルパコウスキアナ'



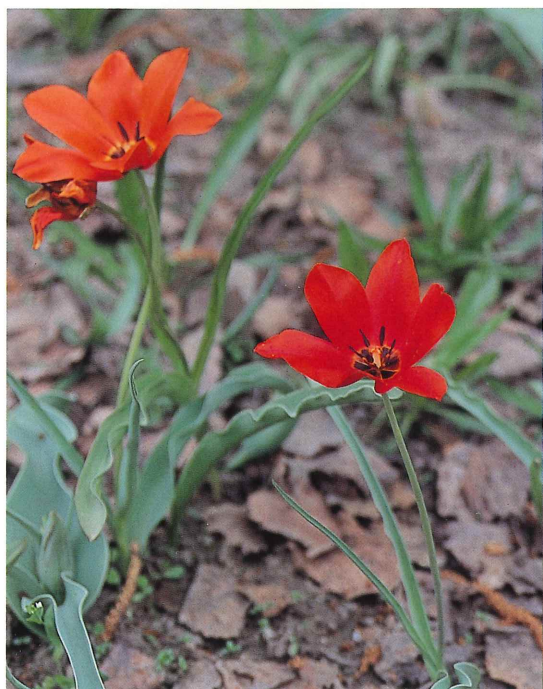
キルギスへ出かけている。

カザフスタンの広さは西ヨーロッパ程であり、人口約千六百万人。最大の都市はアルマティで約百五十万人が居住している。残りの千四百五十万人は百以上に分かれた部族・民

チューリップ四季だより第8号でもご紹介しましたが、カザフスタンはチューリップの自生地として有名な国の一つです。チューリップの野生種を求めて世界中の植物学者あるいは研究者がこの地を訪れています。

cnb MARKT Visie 11000年十月五日号に掲載された、植物学者レマーズが昨年春までにこの地を訪れ、発見したチューリップについてのレポートをご紹介します。

「旅行は本当に若い頃から始めるべきである。六十五回以上旅を重ねれば、もうどこも恐れるところはない。」と、レマーズは言う。彼はかなり前から球根栽培を休んで海外探訪にでている。オーストラリアやニュー



▲T.ostrowskiana 'オストロウスキアナ'

族で、昔タタール人とフィン族が放牧していた広大なステップからなる平原に住んでいる。カザフスタンの南部及び東部はヒマラヤ山脈の尾根に位置し、相当な山岳地帯である。レマーズはこの春アルマティ周辺と、その南西シムケントまで、距離にして約千キロメートルを旅した。マルコポーロがたどったシルクロードの一部を通り、ステップに隣接する地域を行くルートであった。訪問時、チューリップはほとんどの種類が満

開であった。ここは他の地域ではめ
ったに見られない植物が数多く自生
している。幸運にも、植物学者とし
て大変有名なアンナ・イバシエンコ
博士がガイドとして同行してくださ
った。レマーズは約二十種のチュウ
リップについて色や形が珍しい種の



▲T.dasystemon 'デジステモン'

ものをスライドで
六百枚以上残した。
彼は昔のカラタ
ウ山脈の山中（現
在の天山山脈のあ
たり）でグレイギ
ー種を、アルマテ
イ近くのカスケレ
ン地域では、オス
トロウスキアナ、
と、コルパコウス
キアナ、との雑種
チュウリップを二
十種類発見した。



▲T.tarda 'タルダ'

レマーズが出くわした他の種として、
特にオランダでは馴染みの薄い、ゼ
ナイダエ（6種類）、オソポダ、
‘デジステモノイデス’、ヘテロス
フィラ、ベミアナ、が挙げられる。
これらの種の特徴は、その多くが淡
い黄色で、中には花びらの外側に口
ゼ赤の混じったものもある。レマー
ズはそれらを荒地で見つけた。その
球根はチュウリップの背丈と同じ位
の深さの土中にある。はげ山の頂上
に、‘レゲリー’を見つけたのは素晴
らしい発見であった。別の所では多
数のカウフマニアナ種や様々な、グ

これらの雑種は背
丈が三十センチメ
ートルまでのもの
で黄色・赤・緑系
のあらゆる色を持
っていた。

レマーズは、デ
ジステモン、に遭
遇することができ
た。‘タルダ’はよ
く市場で扱われて
いるが、デジステ
モン、はめったに
目にするものでは
ない。‘タルダ’
は白に基部が黄色
の花であるが、デ
ジステモン、は単
色の黄色で花は一
本の茎に一つ咲く。

レイギー、の変種との雑種が見られた。
‘ピフロリフォルミス’、の様々な
変種があった。さらに人が良く訪れ
る地域にはチュウリップ以外の球根・
塊茎植物も非常にたくさん自生して
いることがレマーズのスライドから
明らかである。アイリス、クロッカス、
エルムレス、フリチラリア等々。明
らかにカザフスタンは植物愛好者に
とつてのエルドラド（想像の黄金郷）
である。レマーズの今回のカザフス
タン紀行は大変意味深いものであった。

〈写真提供〉

富山県農業技術センター野菜花き試験場



▲T.kaufmanniana 'カウフマニアナ'

となみチューリップフェア五十回記念 チューリップフェア 五十年史(前編)

砺波の春の風物詩、「となみチューリップフェア」は、今年四月に行われる「2001となみチューリップフェア」で五十回を数えます。その五十回を記念して、今年のフェアは、通常より早く四月二十日からプレイベントを行います。特別企画として「世界のチューリップ」展を当チューリップ四季彩館でも開催するほか、記念セミナーを行うなど、多彩な催しが計画されています。

この記念すべき年に、その五十年の歴史を振り返ってみたいと思います。

年 代

1951

○チューリップフェアへの序曲

占領下、GHQによる全国の行政機関の整理統合が計画される中、出町園芸分場の存続を願い、県西部の市町村や農協によって後援会が結成され、昭和二十六年四月二十九日から五月三日までの間、園芸分場内で満開の数十万本のチューリップの鑑賞会を開催した。これが今日のチューリップフェアの源となったのであった。

1952

第一回(昭和二十七年)

出町など六町村の合併によって砺波町が誕生し、その祝賀気運が盛り上がる中で第二回チューリップフェアがはじまった。園芸分場を一般公開するとともに球根組合では、第二回切り花品評会及び新品種展示会を行い県民の関心を集めた。また、チューリップの

切り花二十万本をミスチューリップ七名の手で贈る「チューリップ百万ドル行進」など豪華な祝賀行事が催された。



1954

1959

第八回(昭和三十四年)

○花の里にふさわしい

「チューリップ音頭」が発表される
チューリップフェア期間中は快晴に恵まれ多くの観光客で賑わった。とくに会場に設けられたステージで、新作チューリップ音頭の発表会も開かれ、フェアは最高潮に達した。

第三回(昭和二十九年)

庄下地区二帯のチューリップはちょうと見ごろとハイキング日和に誘われて、家族連れや、アベック組など県内はもちろん石川県から貸切バス数十台で乗りつける婦人団体客もあり、県農業試験場砺波園芸分場の圃場・庄下の輸入チューリップ隔離栽培圃場は観光客で大賑わいをみせていた。

○チューリップが「富山県花」に決まる

昭和二十九年三月、NHKが全国の郷土の花を選定することとなった。富山県では、数多くの種類の花の中からチューリップを推選した。
三月二十二日、チューリップが郷土の花に選定され、同時に県花と決定した。

1962

第十一回(昭和三十七年)

○人波続くチューリップフェア

開幕以来、連日賑わいを見せるチューリップフェアは、主会場の園芸分場へ人波が続き、満開のチューリップ畑に団体客やピクニックの家族連れが押しかけ、思い思いに楽しむほほえましい姿があちこちで見られた。



○チューリップフェア事務局の開設
前年までのチューリップフェアは県農業試験場砺波園芸分場が中心になつて行われていたが、この年から市が中心となり、チューリップフェア推進協議会によって運営された。

第十三回（昭和三十九年）

○施設を充実して

フェア内容を向上

二十九日から二週間の幕を開けたチューリップフェアは、暖冬と四月上旬の暖かい気候が影響して、例年より開花期を一週間から十日ほど早く迎え、すでに農家では花摘みに大わらわ。フェア期間中には花がないのではと関係者を心配させたが、幸いにも花はいっぱいだった。この年開園したチューリップ公園、

富山県農業試験場

砺波園芸分場付近

では色とりどりの花が新緑の水田とあざやかにマッチし、観光客を魅了していた。

年代

1964

1965

1967

第十六回
（昭和四十二年）



二十九日から開催

された第十六回チューリップフェアは連日超満員。会場に設けられた花の宮殿や怪物が家族連れや団体客の人気をあつめ賑わった。

○入場料を徴収

チューリップフェア

の内容を充実させるために、この年より入場料を制定し、施設の拡張を計ることとした。
大人三十円
子供二十円

○フェア期間中子供歌舞伎を開催

チューリップフェアに来る人々に砺波伝統の祭りである「子供歌舞伎」を見てもらおうと、フェア期間中に行われることになった。子供達の名演技に見物客は拍手が続きであった。

第二十一回（昭和四十七年）

○チューリップフェアに

三十万人

ジャンボ連休に行楽地は連日大にぎわい、チューリップフェアには三十万人が殺到。前年より二万人多く、入場者のなかには遠く北海道や九州、山陰方面から来た人たちもいた。

○チューリップタワー竣工式

四月二十九日午

前八時、前年中に完成されたチューリップタワーの竣工式が行われた後、文字通りフェアのシンボルとなって、子供達に人気を集めていた。



1972

1973

1974

第二十三回（昭和四十九年）

毎年盛大になるチューリップフェア、この年の総入場者は三十六万人、前年の二十六万人よりも十万人多かった。開花がゴールデンウィークにぴったりとマッチしたことが、人出を誘った。

○第二回ミスチューリップコンテスト開催

色鮮やかなチューリップとその美しさを競うキートな乙女たちが集まった会場では、この時ばかりはチューリップの花たちも、首をすくめてミスチューリップの脇役をつとめた。

○チューリップ祭り

美しいチューリップをお土産にできたという要望から、フェア会場の一角にお好きなチューリップを掘り取って、ご家庭に持ち帰っていただけるコーナーをつくった。



第二十二回（昭和四十八年）

第二十二回のチューリップフェアは、例年より三日早い二十六日から十日にわたって開催された。全般的に好天に恵まれ人出は上々、色とりどりのチューリップにシャッターを切る家族連れや、お弁当を広げるグループなど、春のひとときを満喫していた。

○チューリップデコレーションコンテストの開催

この年からデコレーションコンテストを開催。市の青年団やグループがカラフルなチューリップの切り花で描いた力作が勢ぞろい。フェアに「層の華やかさ」をそえた。



第十四回（昭和四十年）

○中越弁慶号公開

明治二十九年にイギリスで製造された中越弁慶号は翌年から県内初の汽車として城端線を走り、子供達の注目の的となった。その後七十年に渡り各地で活躍後引退し、昭和四十年チューリップ公園内に中越弁慶号保存館が作られ公開された。

チューリップ四季彩館
からのお知らせ

○第15回春を呼ぶチューリップ展
「ジャングルチューリップ」

と き 2001年2月21日(水)から3月4日(日)

ところ チューリップ四季彩館ホール



▲第14回春を呼ぶチューリップ展



チューリップ四季彩館
TONAMI TULIP GALLERY

(財)砺波市花と緑の財団

〒939-1381 砺波市中村100-1 ☎(0763)-33-7716 FAX(0763)-33-0090

URL <http://www.city.tonami.toyama.jp/>

2001年1月発行